

琉球大学学術リポジトリ

水稻一期作の育苗

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮里, 清松, Miyazato, Kiyomatsu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19597

なす動脈は充分に入れて肉を乾燥させ、牛が気持よく伏臥するように留意することも肝要なことである。
肥膏が充分に近づいたことを知る目安としては普通下げん部のところへ触つて、その部の脂肪の附着状態をみる。下げん部に

脂肪が沈着すれば体内には相当の脂肪が生産されているのである。その外雌にあつては乳房に、去勢牛にあつては陰囊に脂肪が蓄積して膨れ上ることも知る事が出来る。
(渡嘉敷 綏宝)

水稻一期作の育苗

一、育苗の要点

(1) 保温に注意する。

一期作の育苗は、最も気温の低い時期に行なわれるので、二

苗代期の月平均気温 (摂氏)

那覇	十二月	一月	二月	三月	六月	七月	八月
名護	一七・七	一六・一	一六・〇	一七・七	二六・一	二七・九	二七・七
宮古	一九・三	一五・八	一六・二	一八・〇	二七・三	二八・六	二八・五
石垣	一九・四	一七・五	一七・五	一九・一	二六・六	二七・五	二七・三
		一八・〇	一七・九	一九・六	二七・一	二八・二	二七・九

期作とは反対に、保温に留意しなければならない。早い地方では十月から播種されるが、一般には一月―三月中旬までが苗代期間である。今、各地の苗代期の温度を示すと次表の通りである。

即ち二期作の育苗時期の月平均気温は、十五―十九度で、日によつては十度以下に低下することもあり二期作に比べて著しく低いので、保温については特に注意しなければならない。※

※対策としては保温装置を設置することが望ましいが、一般には早急に採用し難い面もある。普通苗代の場合には日当りの良い場所を選定し、防風垣を築ける。又迂回水路や温水中によつて灌漑水を一度温めしてから苗代に流すようにする。

尚、温度の点からすれば、播種期をおくらずして、暖くなつてから播く方が育苗は容易であるが、田植時期がおくると、開花期以後に暴風の害を被る恐れがある。今後の研究により生育日数の短かい、然も多収の品種が採用され、ば、この点は比較的解決しやすいが、現在の品種では一月中旬頃に播いて三月下旬頃までに田植を終る事が、暴風被害点のからは安全であらう。

(2) 苗の熟度と苗令の一致

発芽発根した苗は土の中から肥料を吸収して生長するが、その際窒素、磷酸、加里を適量に施して、吸収される成分の均一あいを保たなければならぬ。こうして茅葉が出来ると、同化作用が盛んになり炭水化合物が蓄積されてくる。従つて苗代初期の苗は、茅葉中の窒素の量が多く、色が濃くて柔軟であり若苗の状態にある。苗令日数が進むにつれて窒素の吸収方に比べて同化作用が盛んとなり、茅葉中の窒素の割合が減少して炭水化合物の割合が多くなつてくると、茅葉は淡黄色を帯び葉身が硬化した状態になつて所謂熟苗になる。このように窒素の過剰な若苗や、反対に下葉の枯れ上つた老苗でなく、熟苗が最も素賢の良い苗である。苗令日数、耕土の深さ、播種量、施肥量等

を上手に按配して適期に熟苗を移植することが大切である。一方、田植に適当な田の生育程度を示す基準として、苗令日数や草丈を用いるよりも苗令で考えた方が合理的であることにいつては、「二期作の育苗」で述べた通りである。

以上述べた茅葉内の窒素量からみた苗の熟度と、葉数から決定される苗令との關係は、極めて重要なことで両者が田植時期に一致しなければいけない。即ち田植の適期には、苗が熟苗となり適令(二期作では五―六令期)に達していることが必要である。やゝもすると未だ適令苗にならないうちに肥料が切れて適令苗になつた時は窒素の欠乏の著しい老苗になることがある。この様な苗は生長力が劣り、従つて収量が低下する。反対に苗代を深耕し過ぎたり、未熟の有機質肥料を多量に施すと、苗代後期に分解吸収されて適令苗になつたにもかゝらず、いつまでも苗が若々しいことになる。このような苗は植傷みが著しく減収の原因となる。育苗に際しては苗の熟度と苗令を一致させ適期に田植出来るように留意しなければならない。

二、苗代準備

1、整地 苗代は(イ)日当りが良く(ロ)灌漑水の便が良い、(ハ)管理に便利で朝夕にすぐ見廻ることの出来る場所を選定することが期ましい。秋耕起して風化せしめ、次いで三―四寸起度に浅く耕して水を湛え床乾え前、更に耕して代掻を行ふ。床は短冊揚床とし、その作り方は二期作に準じて行い、特に床面に高低のないように注意する。

2、肥料 二期作に比べて苗令日数が長いので苗代後期に追肥を施す。一例として名護農研指所の施肥基準を示すと次の通りである。

苗代坪当施肥量 (晩生種)

堆肥	基肥	追肥	合計
一〇〇〇匁	〇	一〇〇〇	一〇〇〇
硫酸安	一五	一〇	三五
過磷酸石灰	一五	〇	一五
硫酸加里	一〇	〇	一〇

(備考) 堆肥は熟したものをお餅の際、盆肥は床作りの際
に施用する。追肥は播種後一ヶ月目に硫酸洋当一〇
匁を水五合に溶かして散布する。

三、播種

一期作の播種期は温度が低いので浸種、消毒の後、芽出しを
行ふ必要がある。芽出しは普通、催芽といひ、その方法はいろ
いろある。例えば、浸種、消毒の終つた種子を、三十七三十八度
(撰氏)の温湯に五分浸漬して後、俵その他に入れて保温する
か、或は四〇度以下の風呂湯に浸しておくといふ位で幼芽が
外部にあらわれる。幼芽は二、三、五分程度に伸びたのが良く、
余り伸び過ぎると播種の際折損の恐れがある播種量は洋当三匁
が標準で、厚播きにすぎると良い苗は得られない、揃つた良い
苗を作るには播床の均平と肥料、種籾の均播に特に注意しなけ
ればならない。播種後は板で軽くおさえ一畝が移動しないよう
にする。余り深くすりこむと根の伸長が妨げられて二、三日
の一因となる。

四、管理

最も重要な点は水のかけひきによつて温度を調節(保温)す
ると共に酸素の欠乏を来さぬように留意することである。
播種後一、二日は七八分の深さに水を湛え、芽が床面にあら
われる頃から層間は排水して薄にたけ水を入れ、芽下しを行つ
て根の伸長を促し、地上部と根のつりあひのとれた苗を育てる
ように心掛ける。尚、気温の低下する時や降雨の際には床面に
水を入れて苗を保護する。その他必要に応じて薬剤散布やヒエ
ぬきを行ふ。

五、苗代日数

一期作の育苗日数は播種時期や地域によつて多少異なるが、
四〇―四五百(苗令五十六令期)が適當であらう町時によつ
ては六〇―七〇日苗を用いているところもあるが、このような
苗は既に老化している。抜取つてみると殆どどの根が黒ワツ色
―黒色を呈し若々しい根はみられない。従つて一田植後の発根が
貧弱で落葉がおくれることになる。各作の悪い経験な由で多取

を望むことは無理であらう。

六、良苗の条件

古くから苗半作とか苗七分と云われるように苗の良否が直接取
量に影響を及ぼし増収を図るためには先づ良苗を育てることが
前提条件となる。良苗とはどんなものか、というところや、こ
しい問題であるが、外観的には、
1、大きき八八寸位で本葉が五―六枚程度のもの
2、苗が太くて、基部の充実したもの
3、葉色の中葉なもの
4、生育の揃つたものということ
も出来る。しかし又良苗の条件としては次ぎ活苗の良否を決定
する発根力が旺盛であること、次に強かな有効分けつを確保な
るために苗令が適當であること二点に要約して考えることが
出来る。

(イ) 発根力が旺盛であること。

水筒栽培では手とし、努力関係から、蔬菜や果樹のように根
を切らずに床土を多量つけたまま移植することは考えられない
ので、先づ第一に活苗の良否を左右するのは発根力である。
苗は移植によつて、苗半時代の古い根の大部分が傷められるの
で新しい根が出てから生長を始める。新根の発生が早く、発根
力の強い苗は、枯傷も少く移植後の生育が順調に行われる。発
根力は苗の作り方、特に育苗日数によつてことなる。若苗は根
の出かたが早いが発根力は熟苗になるにつれて強くなる。従来
の試験によると育苗日数四五日頃の苗が発根力が大きく、老苗
になると著しく劣つてくる。

又苗の発根力は茎や葉の生育状態でも異なる。薄播きすると
内容の充実した、ひきしまつた苗となり発根力が強くなる。厚
播きすれば栄養の悪い細い苗となり、発根力は弱い。従つて発
根力が盛んで傾いたみの少い良苗を得るためには育苗日数を考
慮し密播に過ぎないように心掛けるべきである。

(ロ) 苗令が適當であること

活苗すると新しい葉が次々出て出て分けつち増えてくまが、
①分けつち位に進むにつれて葉数、粒数、植重が減少する。

と②苗令が進みすぎると分けつちの出る位置が上昇すること(従
つて適令期の苗を用いなければいけないこと)などについては
「二期作の育苗」で既に述べた通りであるが、育苗日数が長
きて苗令の進んだ苗を植えると、移植後もまなく主根だけが
伸び分けつちの種は普通の時期に出ることがある。この現象を不
時出穂と呼び、早生の品種におこりやすい。不時出穂をおこさ
せると最も大きな穂をつけるべき主根が無駄になるので多収は
望まれない。不時出穂の現象は御繩で用いている晩生の品種で
は少ないが、将来品種を導入して適品種を選定する際には一応注
意すべき点であらう。

読者だより

(前略) 八月号に宮里清松氏の御執筆の「水筒一期作の育苗」
中(七)、苗代日数の欄は大変有益なる御教示が各地方共割合
に他府県に比し厚播きの我が郷土では苗代密植のため分けつちを
休眠させている事を二般農家は知らず取草に多大の損失を毎年
繰り返しています。

八重山では気の早い連中は十一月中旬から一期作の播種を致し
ますので十一月号に「水筒一期作の育苗」につき御研究の結果
を御発表下さる様切に御願ひ申し上げます。薄播の健苗を作つて
一本植の励行が琉球の水筒作の急務かと切切に感じています。
(後略) (八重山石垣市大山 山城興常)

発行所 琉球大学農家政学部

発行人 島袋俊一

印刷所 沖繩タイムス社